

# 北海道のまちづくり ー持続可能なまちづくりから多世代・多地域間のつながりを考えるー

活動場所：北海道富良野地域

活動時期：平成 18 年 4 月～

## 発表団体

同志社女子大学現代社会学部  
社会システム学科 天野太郎ゼミ



## 連携メンバー

(一社) 暮らしステーション  
富良野市教育委員会教育長  
富良野市議会議員

北海道観光大使  
北海道立富良野緑峰高校教諭  
(一社) Bridge for FUKUSHIMA

## 活動内容

北海道富良野地域は、全国的にも有数の観光地であるが、高校生以上の若者が極端に少なく、外部からの流入者が多い。そうした若者の視点を、京都の女子大学の視点から交流をすすめるなかで、まちづくりへの視点を提示、発信している。3 回生以上が 7 泊 8 日で現地に滞在し、現地の高齢者や小中高校生とフィールドワークや協働プログラムを通じて、地域を超えた、さらには地域に共通した課題を共有しながら、11 年間にわたり長期的な視点で活動を実施している。

この富良野における地域学習の特徴は、異なる地域間の事例を比較・対照させながら考えていく「多地域型」の地域学習である点である。学生たちは京都学をベースに、京町家におけるさまざまな京都文化のありかた、京都の中心市街地の諸課題について、京都の事例と富良野の事例を相互比較しながら、提言を行うことが可能となる。また、東日本大震災の被災地にも、年間 2-3 回のペースで訪問し、復興の実態やあたらしく計画されていくまちづくりについて関係各所と協同で学習をおこなっており、そうしたまったくあたらしいまちづくりの実態についても相互比較をおこない、京都を軸に発信し、京都へと還元していくまちづくり学習の構造を目指している。

そうした女子大生の視点から中心市街地のまちづくりを提唱・発信している。富良野においては 2017 年度に富良野市文化会館において学生を中心とした上述のまちづくりに関する女子大学生の視点からの提言を行い、意見交換を実施した。

また、こうした京都や東北被災地・富良野におけるまちづくりを比較・対照させていく上で重要なのは、「多世代型」の視点である。富良野においては、現地の小中高校生ならびに高齢者とともにまちづくりのジオラマを作成し、これからの中心市街地の方向性を 2017 年に富良野市にて報告を行った。また、高校生とともに食文化の発信プログラムを 8 月に実践し、さらには北海道の高校生を京都に招き、京都でも 11 月に富良野の食文化発信を相互に実践する予定である。

さらに、東北被災地においては、胎動するあたらしいまちづくりに現地の高校生たちがどのように関わっているのか、現地のサポート団体とも協同で学習を進めるとともに、2017 年 2 月ならびに 2018 年 2 月には仮設住宅訪問を実施し、高齢者とともにこれからのまちのかたちを話し合うことを実践し、さらに継続的な活動を予定している。

## 連携メンバー・役割

|                           |                                      |
|---------------------------|--------------------------------------|
| (一社) 暮らしステーション            | 活動場所の提供・情報提供                         |
| 富良野市教育委員会教育長              | 学校間の調整、富良野高校生を京都へ派遣・交流する             |
| 富良野市議会議員                  | 現地関係各所との調整                           |
| 北海道観光大使                   | 富良野地域の観光施設・ホテルなどの調整、情報提供             |
| 北海道立富良野緑峰高校教諭             | 富良野の高校生の連絡調整                         |
| (一社) Bridge for FUKUSHIMA | 福島県における高校生・大学生とまちづくりについて復興庁と連携している団体 |

## 取組の成果・活動で工夫した点

地域連携を通じた学習を、長期的にかつ持続的に行ない、現地の高校生や各団体と連携した活動を展開してきた。活動で学生が発信した内容が、議会でも取り上げられるなど、具体的なまちづくりにも大きく寄与してきている。また京都での学習も現地にフィードバックし、かつ現地の高校生が京都に来る際にサポートを行うなど、相互交流も活発に展開してきた。

## 今後の課題・目標

### ◆今後の課題

学生の学年間の継承性。3 年次生が主体の活動のため、教員は連続しているものの学生の「顔」が変わるため、現地の方々と深いレベルで学生と地域との関わりには毎年ゼロから時間を要し、滞在期間の制約から課題が存在する。そのカバーの意味も含め、教員が数度に渡り地域の人々と直に交渉し、情報共有を行っているのが現状である。

### ◆目標

地域の方々とよりスムーズな情報共有のありかた、学生や地域の中高校生と、持続的な連携関係を構築していく仕組み（大学卒業後も地域連携としてさまざまなかたちで関わりを持つしくみ）を構築していくことを目標としている。

